

高等学校 国語科 学習指導案

指導者 田村 圭佑

- 日 時** 令和7年11月28日（金） 第2限 10:35～11:25
場 所 第4研修室
学年・組 高等学校I年3組41人
単 元 「花は盛りに」『徒然草』（『精選 言語文化』明治書院）所収
『評解 新小倉百人一首』京都書房
目 標
- 古典の世界に親しみ、古典を読むために必要な文語のきまりや古典特有の表現を理解することができる。（[知識及び技能]（3）ウ）
 - 作品の内容や表現を踏まえて、人の価値観や感じ方を読み取り、自分の考えと照らしながら我が国の言語文化への理解を深めることができる。（[思考力・判断力・表現力等] B 読むこと オ）
 - 兼好や歌人の言葉を通して多様な価値観に触れ、自らの考え方を構築・調整しようとする態度を養う。（[学びに向かう力・人間性等]）

指導計画（全5時間）

第一次	『徒然草』第137段の精読と価値観の読み取り	2時間
第二次	『百人一首』の鑑賞と価値観の整理	2時間
第三次	『徒然草』、『百人一首』、自己の価値観を比較・批評	1時間（本時 5/5）

授業について

本授業では、『徒然草』第137段「花は盛りに」を題材として、人々が自然やものありようをどのように感じ取り、そこにどのような意味づけや価値づけをしてきたのかを考える契機とする。本文には「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」とあり、兼好は満開や完全な姿だけを良しとするのではなく、むしろ「盛りを過ぎた後」や「陰りを帯びた姿」にも心を寄せる視点を提示している。この視点は、目の前の光景をそのまま受けとめるだけでなく、過ぎ去ったものやこれから訪れるものを思い描くことで豊かさを見いだす点に特徴がある。こうした思考のあり方は、古歌の記憶や文化的な背景に支えられており、他の和歌や古典と関係づけて読むことで、その多角的な意味がより明らかになると考える。

授業ではまず「花は盛りに」を精読し、兼好が示す価値観を文中の表現や語句をもとに学習者自身の言葉で整理する。移ろいの美や不完全の趣、初め終わりに見いだされる味わいなど、本文から読み取れる視点を丁寧に確認したうえで、学習者が自らの感じ方と照らし合わせながら理解を深める。続いて百人一首を鑑賞し、古人が自然や恋、人生の移ろいをどのように詠み、そこにどのような価値づけや感じ方をしてきたのかを味わう。第一次で扱った兼好の視点を踏まえつつ、百人一首に見られる多様な価値観を整理することで、古典における美意識の幅広さを実感させる。そのうえで両作品を往還しながら「比べ読み」を行い、それぞれの感じ方や考え方の違いに注目する。この比較は、共通点や異なる価値観を手がかりに自らの読みを更新することを目的とする。

本授業は、研究主題「カリキュラム・マネジメントを志向した学びの価値の創造—多角的な見方・考え方を育成する探究—」の一環として位置づけられる。『徒然草』と『百人一首』という異なる形式の古典を往還しながら比較・考察する学びを通して、学習者は多様な価値観のあり方を認識し、他者と関わりながら自らの考えを言語化・再構築する力を育む。これは、VUCA時代に求められる柔軟な思考力と、他者との協働を基盤とした主体的な学びの姿勢の育成にもつながると考える。

題 目 主題的に多角的な見方を探る『徒然草』の授業

本時の目標

1. 『徒然草』と『百人一首』の表現や語句を手がかりに、それぞれに表れた価値観の特徴を整理することができる。
〔知識及び技能〕
2. 両作品の価値観を比較し、自分の感じ方や考え方を言葉で表すことができる。
〔思考力・判断力・表現力等〕
3. 他者の考えに耳を傾け、多様な価値観を受け止めながら自分の考えを広げることができる。
〔学びに向かう力・人間性等〕

本時の評価規準（観点／方法）

1. 古典の表現や語句を理解し、そこに表れた価値観の特徴を適切に捉えている。
〔知識及び技能〕／ワークシート・発表内容
2. 『徒然草』と『百人一首』の価値観を比較し、自分の感じ方や考え方を表現している。
〔思考・判断・表現〕／ワークシート・発表内容
3. 他者の考えを受け止め、自分の考えを見直しながら学びに向かう姿勢を示している。
〔主体的に学習に取り組む態度〕／ワークシート・発表内容

本時の学習指導過程

学習内容	指導上の留意点	評価の観点と方法
(導入) 1 前時までの活動を振り返り、本時の活動について理解する。	『徒然草』、『百人一首』について、振り返らせる。	
(展開1) 2 兼好の価値観を手がかりに、百人一首の分類と評価を発表する。	発表者：分類の軸・理由・気づきを簡潔に発表させる。 聞き手：分類の違いや価値観の幅に注目し、質問を記録させる。	【知識及び技能】 【思考・判断・表現】 (ワークシート・発表内容)
(展開2) 3 発表を踏まえて、兼好と百人一首の価値観の共通点・相違点を整理し、自分の考えをまとめるとする。	Google フォームに、発表で得た分類や理由を根拠に記述させる。兼好との共通点・相違点を意識させ、考えをまとめよう促す。	【思考・判断・表現】 【主体的に学習に取り組む態度】 (ワークシート)
(まとめ) 4 授業の振り返りを聞く。		
備考		

問 以下の百人一首の歌を兼好ならどう評価すると思いますか？理由も併せて考えよう。

番号	歌	
	評価	理由
2	春すぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ 天の香具山	
4	田子の浦に うちいでて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪はふりつつ	
5	奥山に もみぢふみわけ なく鹿の 声聞くときぞ 秋はかなしき	
9	花の色は うつりにけりな いたづらに わが身よにふる ながめせしまに	
17	ちはやぶる 神代もきかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは	
22	吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を 嵐といふらむ	
25	名にしおはば 逢坂山の さねかづら 人にしられて 来るよしもがな	
26	小倉山 峰のもみぢば 心あらば いまひとたびの みゆき待たなむ	
32	山川に 風のかけたる しがらみは ながれもあへぬ もみぢなりけり	
33	ひさかたの 光のどけき 春の日に しづ心なく 花のちるらむ	
35	人はいさ 心もしらず ふるさとは 花ぞ昔の 香ににほひける	
36	夏の夜は まだ宵ながら あけぬるを 雲のいづこに 月やどるらむ	
61	いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな	
81	ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただありあけの 月ぞ残れる	
97	こぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 焼くやもしほの 身もこがれつつ	

兼好の価値観にせまろう！（グループワーク用）

①グループ番号 ()

メンバー () () () () () () ()

②個人評価の比較（各メンバーの評価を記入し、最後にグループの結論をまとめましょう）

番号	さん	結論						
2								
4								
5								
9								
17								
22								
25								
26								
32								
33								
35								
36								
61								
81								
97								

③評価の理由に共通する言葉や考え方（共通するキーワードや考え方をここに書き出してください）

④評価が分かれた歌とその理由（評価が分かれた歌番号と、なぜ意見が違ったのかを記録してください）

⑤グループの分類フレーム（分類名や軸を決めて、その理由を記入してください。分類数が足りない場合は裏を使用してください）

分類名 1: _____

理由: _____

分類名 2: _____

理由: _____

分類名 3: _____

理由: _____

分類名 4: _____

理由: _____

実践上の留意点

1. 授業説明

本実践は、「花は盛りに」が定番教材でありながら、生徒の学習が内容理解にとどまり、兼好の価値観を自らの対象として十分に扱えていないという授業者の課題意識から構想されたものである。

まず、本文から「①花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものは。②よろづのこととも、初め終はりこそをかしけれ。③すべて、月・花をば目にて見るものは。」を、以後の活動で生徒が参照する「読みの視点」として明示した。続いて百人一首を扱うにあたり、授業時間数との兼ね合いから、授業者が十五首を意図的に選定した。春夏秋冬・恋・雑歌といった部立てや作歌時代に偏りが出ないようにすることで、生徒の読みが特定の方向に誘導されることを避けるとともに、価値観が時代によって変化することを捉えやすくした。これらの和歌を用いた個人活動では、「兼好ならどう評価するか」を問い合わせて示し、感覚的な「好き／嫌い」に流れないよう、本文に示された価値観と和歌の語句を関連づけて根拠を記述させた。続くグループ活動では、個人の評価を照らし合わせ、評価が分かれた和歌について、用いた価値観や根拠となる語句を説明し合い、違いの理由を整理させた。さらに、和歌の特徴を整理する分類フレームを作成させたところ、読みの視点と語句を照合する方法、数値評価の差を基準とする方法、独自の二軸を設定する方法など、多様な枠組みが生まれた。判断に迷う場面では本文に立ち返り、基準を確かめる姿も見られた。

本時の全体発表では、分類の相違をめぐって「どの語句を根拠にしたか」「どの価値観を優先したか」という質疑が行われ、同じ価値観でも着目点や解釈の順序によって評価が変わることに生徒自身が気付いた。授業後のアンケートでも「視点が違うと見え方が変わる」「兼好の視点で読むと和歌の印象が変わった」といった記述が多く見られ、これまで内容理解にとどまりがちであった古典に対し、価値観を基準に読み直す姿勢が育ち始めていたことが確認できた。

2. 研究協議

研究協議では、複数の教材を関連づけて読む構成の利点と留意点について意見が交わされた。

利点として、『徒然草』に示された兼好の価値観を「読みの視点」として明示したことでの、生徒が百人一首を読み直す際の根拠が明確になり、解釈の違いを可視化しやすくなった点が評価された。また、複数のテキストを往還することで、単一教材では得にくい比較の視点や、自らの読みを相対化する姿勢が自然に生まれていたことも指摘された。

一方で、教材を組み合わせる際に、兼好のどの価値観を基準として示し、どこから生徒に委ねるのかといった設計上のバランスの難しさが共有された。加えて、時間的・作業的負担や、表現活動・分類活動を単元の評価にどのように位置づけるかという点も留意点として挙げられた。特に、育てたい力を明確にした上で教材を組み合わせる必要があるという指摘は、本実践の方向性とも深く関わるものであった。

以上をふまえると、本実践は、兼好の価値観を「読みの視点」として設定し、和歌を読み直す活動を通して、生徒の読みを深める契機になっていたと評価できる。一方で、単元目標の明確化や教材選択の必然性、評価の整理といった点は、複数教材を扱う授業全般に共通する課題として明らかになった。こうした視点をふまえ、今後の授業改善につなげていきたい。